

畳堤

「畳堤」と書いて「たたみてい」と読みます。畳堤とは、普通の堤防とは異なる構造を持つ「特殊堤」の一つです。揖保川に残る畳堤は、民家などの畳を堤防として利用するたいへん珍しい堤防です。今ではその名を知る人も少ない畳堤ですが、昭和20年代、周辺住民の希望を入れて、「防災と景観」を考へて築かれた堤防は、現在の河川整備、防災のあり方にも貴重な教訓を残す先駆的なものでした。

住民を苦しめた“暴れ川”

兵庫県を流れる一級河川、揖保川は平安の昔から水害の歴史があり“暴れ川”の異名をとる川でした。特に梅雨の時期、台風の季節には水量が一気に増加して、たびたび堤防の決壊を招いていました。

近くは明治25年(1892)、大正7年(1918)、昭和16年(1941)に揖保川下流全域にわたっての大水害が発生しました。さらに昭和20年(1945)は7月から10月にかけて堤防の決壊が相次ぎ、濁流が民家や田畑をのみ込む被害が続出しました。

度重なる水害に苦しめられた住民たちから堤防建設の声が高まり、「畳堤」の設置が検討されることになったのです。

眺望を守るために考案された畳堤

揖保川下流の堤防が、土を高く盛り上げて築く通常の堤防ではなく、特殊堤になったのにはこの地域の土地事情があります。川に近接して民家や道路がつくられているため、土手の後背地が非常に狭いのです。堤防の台形型の盛土をするためには民家が移転をして、堤防の用地を確保しなければなりません。そして目の前に壁のようなコンクリート堤ができればせっかくの揖保川の流れの景観が遮られてしまいます。

そこで、「従来の生活環境を守ってほしい」「川の眺望を残してほしい」という住民の要望を受けて、岐阜県長良川の畳堤をモデルに設計されたのが揖保川の畳堤なのです。

畳堤の構造は、支柱を等間隔に立ち上げて、そこに畳をはめ込む方式になっています。一見すると橋の欄干のようですが、近寄って見ると支柱に畳の厚さ分の溝が彫られています。もし増水して、警戒水位を超えそうになったら、水防倉庫に備えた畳や周辺民家の畳を運んでここにストンとはめ込めば、一転「畳の壁」になって、堤防の役目を果たしてくれるというわけです。



普段は橋の欄干風。堤防と気づかない人も多い。しかし畳をはめ込んだら氾濫を防ぐ堤防に変身。

自主防災活動のシンボルに

畳堤が建設されたのは昭和25年(1950)から数年間のことで、揖保川下流の龍野市、揖保郡揖保川町、御津町の総延長約3.1キロメートルに築かれました。当時、旧建設省姫路工事事務所で建設に携わった担当者は、「あの当時、景観・環境を重視して畳堤を考えた人はすごいと思いますね。畳はどこにでもありますし、水を含んだら膨張して強度が増しますから防災効果もあります」と振り返っています。

幸いなことに、畳堤が設置されて以来、揖保川に大きな水害は起こらず現在に至るまで畳堤の出番は一度もありません。しかし近隣の人々は「揖保川が増水していいよ危険になったら堤防に畳を入れるということは親から聞いていました」と語ります。

畳堤は住民と行政の協力によって「完成」する堤防です。揖保川の貴重な土木遺産・畳堤は、住民の自主防災活動のシンボルでもあるのです。

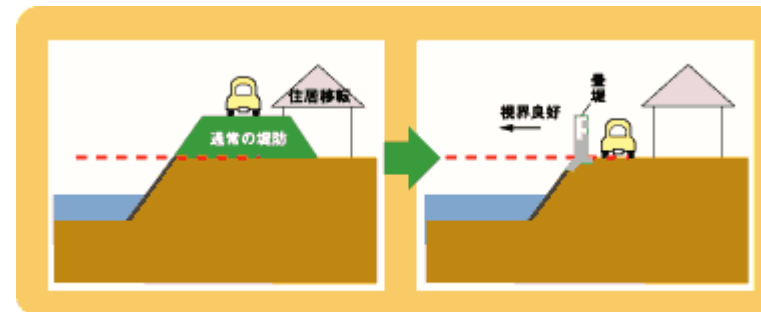
なお、全国の特設堤で現存しているのは、揖保川と、長良川水系の畳堤(岐阜県)、延岡市の畳堤(宮崎県)の3カ所です。



揖保川は、古くから災害の記録が多く、特に梅雨の時期や台風の季節には頻繁に大水害が発生していました



一見、橋の欄干のように見える量堤のフレーム



量堤がつくられた地域は川から住宅までの距離が大変短く、土手をつくることはできません
※赤色の破線は洪水の危険ラインであるハイウォーターレベルを表しています